

吉越昭久 著

『近世福山城下町の歴史災害』

文理閣 2020年11月 228頁 5,000円+税

日本国内において大きな災害が頻発するようになったといわれて久しい。特に降雨に起因する浸水被害や山間部での土砂崩れは毎年のように発生し、被害の状況や救助活動を被災者自らが動画に記録・公表する機会も増えている。このような可視化された情報量の増加も、多くの人に災害の頻発を印象付けるといった時代的な背景も看過できない。そして災害後に、ハザードマップや地形分類図、地域の言い伝えなどが紹介され、「実は危険地帯だった」というような取り上げ方がなされることも多い。経済性が重要視される現在においてその可否はここでは論じないが、過去に発生した災害の状況を復原し、現代に提示することは従来から歴史地理学において重要なテーマであり、今後も必要とされていくことは自明の理であろう。

本書は、長く水に関する地理学的研究や歴史災害研究に携わってきた筆者による、広島県東部、瀬戸内海に臨む福山城下町周辺を事例とした、近世における災害と地域の対応に関する事例研究である。しかしそれにとどまらず、歴史学的手法を用いつつも、「過去の災害をできるかぎり正確に復原し、そこから得られた先人の知恵を抽出しそれを将来のまちづくりや地域計画に活用すること」(22頁)も視野に入れたものである。構成を以下に紹介する。

- I 章 序論
- II 章 研究対象の地域と期間
- III 章 歴史災害の概要と時間的・空間的变化
- IV 章 城下町建設とその後の変化
- V 章 環境条件から求めた被災域
- VI 章 防災・減災とその効果の評価
- VII 章 歴史災害から抽出する防災・減災の知恵
- VIII 章 結論

I 章では、災害の定義と分類を行い、歴史災害を研究対象とする際の主要な論点を紹介する。そして、かつて笹本¹⁾が論じたように、災害を過去に発生した歴史上の出来事としてとらえるか、現在に通じる防災手段の一助とするかという研究手

法に関わる議論を通じて、本書はその両者を橋渡しする意図があることを明らかにしている。

それを受けてII章では研究対象の妥当性について、福山の自然環境の特徴と、江戸時代を中心とした社会背景の検討から明らかにしている。福山城と城下町は芦田川下流域に形成された沖積平野上と、北側の小丘陵からなり、その建設には芦田川の瀬替えと旧流路を利用した大規模な土地改変を伴っていること、海岸部は近世初期から瀬戸内海を干拓し陸地を広げたことが特徴である。また、同時期に全国的にどのような災害が多かったかの概略も示される。

III章では、土肥日露之進が翻刻した『備後福山藩災害史考(一)～(七)』を主な史料として、「福山城下町災害史年表」を作成している。年表では福山における元和5(1619)年から慶応4(1868)年に至る249年間について、地震・火災・風雨・出水・洪水・旱魃・その他に分類して被災した回数を明示する。そして50年ごとの集計から、後半の100年で火災、風雨、出水がそれまでの2倍以上に増加していることを指摘し、災害の平穩期、災害の多発期を明確に区分する。また、前述の『備後福山藩災害史考』から、(1)地震(嘉永7(1854)年11月)、(2)火災(享保19(1734)年2月)、(3)洪水(文政11(1828)年6月)、(4)旱魃(安政3(1856)年)夏、(5)高潮(延宝2(1674)年8月)と実際の記載例を紹介している。

事例研究としての核となるIV章では元和5年(1619)に開始される福山城と城下町の建設とその後の推移を、主として各年代の城下町絵図の記載と、『備陽史探訪』で考察された城下町内部の変化を引用しながら取り上げる。福山城は、近世以前にこの地域の中心地であった神辺平野からあえて離れた海岸沿いの干潟に近い場所に防御目的で造られた。その際に平野の中央を西から東へ流れていた芦田川の流路を変更し、平野西側を北から南へ流れるよう固定した。そして城北側の分流として吉津川を開削し、旧河床の一带に城下町を建設、一部は城の外堀と瀬戸内海を結ぶ入川として水域を再整備した。城下町の範囲や町割り、江戸時代初期の建設当初から幕末まで大きな変化はないが、町場の拡大による橋の架橋、大火による町人町の移動や新設があったことが指摘されている。一方で、城下町南部に広がっていた干潟は

大規模に干拓が行われ、農地では塩害に強い綿花が藩の重要な商品作物となっていた。

V章では福山城下町の範囲で発生した水害について、史料から得られる洪水、渇水、高潮の具体例と、福山に存在する自然・人文に関する環境条件から、具体的な被災域を復原していく。まず天保11(1840)年6月5日に発生した洪水を取り上げ、農地の被害反別と石高、そのほか土地利用や工作物の被害を把握し、同日の被害が確認できる別の史料と比較しながら被災域の復元を目指す。しかしながら史料には一部の被災村や地名があるのみで、福山城下町のどの範囲まで被害があったのかは不明であるとする。同様に渇水被害は嘉永6(1853)年6月、高潮は文化13(1816)年8月に発生した状況を検討するが、いずれも被災域の特定には至っていない。そこで本書では福山の環境条件から被災域を比定する作業を行っていく。すなわち、洪水、渇水、高潮被害に関して、位置、地形、水域、防災施設、土地利用という5つの指標に分類し、それぞれが重なり合う地点を「被害を受けやすい地域」として図示した。

VI章は福山藩の防災・減災対策をハード・ソフトに二分し、その役割を解説している。ハード面では、乗り越え堤と遊水地の組み合わせが芦田川の狭窄部と城下町建設初期に瀬替えた地点に配置されていること、上流域や支流の各地に設置された砂防堰堤の「砂留」が芦田川の河床上昇を抑制する重要な対策であったことを指摘する。一方ソフト対策では、河床浚渫の制度化と、増水時の堤防の警戒や対応を示した「水防令」が有効に機能していた。特に「水防令」は宝永元(1704)年の制定から8回改正され、徐々に具体的な「マニュアル」として整備されていくさまを指摘している。例えば、1回目の水防令は各地への通達方法と、芦田川の増水の高さごとに役職を割り振られた役職名程度しか記載がなかったのに対し、4回目の改定がなされた文化8(1811)年には増水9尺の高さから5寸ごとに、誰が何をするのか、藩、町方、村方のわけ隔てなく、指示系統が明記されている。また、このほかにも、福山藩は被災した村々への救済措置として、一定期間年貢を免除する「起こし鉏下年季」や救い米を制度化しており、さらに地域内では相互扶助を目的とする「義倉」や「社倉」といった慣習も存在してい

た。そして本章の最後に被害抑止力、被害軽減力、予知・早期警報力、被害実態把握力、復旧復興力の5つの観点から近世の水害対策の評価を試みている。

前章の評価を踏まえ、VII章は先人が築いてきた防災・減災の知恵を抽出し、それを伝える方法を検討している。まず災害のうち地震・火災・土砂災害・水害・気象災害の5種類について、それらに関する防災・減災の知恵をハードウェア、システム・制度、知識の3つに分類する。それを福山城下町に当てはめて各種水害対策を抽出するが、これらはVI章で検討した内容と重複がある。知恵を伝える方法に関しては、社会教育や学校教育を通して、将来にわたって様々な人々に防災のあり方を伝えていく重要性が述べられている。

VIII章は結論となり、課題と展望として、「考察に必要となる肝心な史料を見つけだすことはできなかった」(202頁)こと、「採用した方法で求めた地域と実際の史料から求めた地域とのギャップをいかに埋めていくか」(203頁)などを挙げて

いる。本書は、福山城下町のモノグラフであると筆者が明記しているように、主要な部分はIV、V章に記載された芦田川の水害について、近世における福山城と福山城下町の治水、利水の対応を「備後福山藩災害史考」の記載を元に明らかにしたものであり、後に続くVI、VII章の防災減災対策とその評価も、水害を念頭に置いたものとなっている。一方で、I章では筆者と福山とのかかわり(I-1-(4))や、これまでの災害地域研究を自身の研究略歴と共に紹介するなど(I-3)、純粋な意味での学術研究とは一線を画した構成となっている。筆者も本書を書き下ろした動機として、論文として発表するにはテーマの重複があること、図表・写真など制約なく単行本に掲載できること、投稿・修正の時間的猶予のなさなどを挙げている。こういった本書の性格上、細かな論証の齟齬までは指摘しないが、論者が特に気になった点をいくつか紹介してみたい。

まず第1は災害の意味付けと時代設定に関することである。III章において福山で記録に残る災害全般の回数を集計し年表として提示するが、小氷期による寒冷化や瀬戸内式気候特有の干害など、その影響が対象地域よりも広範囲に及ぶものと、

火災や高潮のように対象地域内で範囲が限定されるものでは、質的な被災内容が大きく異なるはずである。そのことに関して、福山の火災など一部の事例は京都との比較にも言及しているが、筆者らがこれまでに行ってきた京都における歴史災害のGIS化、データベース化といった研究蓄積と合わせて²⁾、回数集計だけではない体系的な見解を示してほしかった。また、時代設定に関しては、Ⅱ章においてまず福山を研究地域とする妥当性を示し、次に近世を対象とする時代設定の是非を検討する構成となっている。しかし福山の概観を紹介する中に、すでに〈近世の地形〉、〈近世の気候〉、〈近世の都市〉が項として存在しており、近世を取り上げることを前提とした論述が先走って進んでしまっている。

第2に、記述内容と掲載絵図のミスマッチである。本書の福山城下町に関するⅣ章の記述では、福山城下町の絵図が複数掲載されており(第18図、第19図、第20図)、それを基に町場の拡大などを指摘する。しかし写真からは書き込まれた文字が判別せず、橋の新設や町人町の部分は、絵図の一部を拡大して掲載するなど工夫が必要であった。また本文では「福山城城絵図」の記載内容を詳細に述べ、「このように、この古地図からは、入川も含め、当時の水域が明瞭になる」(102頁)としているが、残念ながらその絵図が掲載されていない。城下町の水域が詳細に読み取れるならば、流路変更前の芦田川の河床との関係など、絵図から得られる情報も数多いはずで、他の絵図を削ってでも本書に入れるべきであったろう。

第3に、水害の実態を復元する上で、芦田川下流域左岸のごく限られた場所である福山城下町のみを取り上げる意味はどこにあるのであろうか。確かに、城下町の範囲は「備後福山藩災害史考」など本書の論拠となる史料に記載された分量が多く、分析や復原が容易ということは挙げられよう。しかしながら年表等の作成に有効な史料と、被災域復原に使える史料は本来性質が異なるわけで、そのことを最初に論述する必要があったのではないだろうか。それを加味したとしても、水害研究においては、特定の場所の被害に限定するよりも流域全体を対象とする方が一般的ではないだろうか。例えば筆者が水害対策として重要視する乗り越え堤と遊水地の組み合わせによる治水対策

の1つは神辺平野に存在するし、河床上昇対策であった砂留は上流域の支流に多数存在している。もちろんその情報は本書においても触れられているが、砂留の分布を示した流域図が1枚でもあれば、その効果がより説得力を増して読者に提示できたはずである。また被災範囲の復原も「被災域がある程度判明し、地図化が可能になるのは、福山平野に入る地形的な狭窄部から上流域までである」(121頁)としている。このように本書では使用した史料の性格上、福山城下町とそこから外れる場所とで、様々な情報が取捨選択される傾向が強い。それゆえⅤ章では史料から得られなかった城下町の被災域を環境条件から推定していくが、それらに関してはⅡ章第3図(29頁)の地形分類図を見れば、水害の被害を受けやすい場所がどこかはおおよそ判断できるわけで、高潮以外のオーバーレイ図を提示する必要性も含めて検討の余地が残る。もし論者の指摘が見当違いであったとしても、第30図から第32図までの3枚のオーバーレイ図は、どの地点にいくつの重なりがあるのかわかりづらい。その前の第26図から第29図はカラー図版であり、同様の配慮があってもよかったかと思う。

また、対象を城下町周辺に限定した結果、福山藩の政策や対応、藩域の全体像も不明となっている。藩にとっては城下町だけでなく、むしろ年貢収量に直結する村方の田畑被害が大きな関心事であったはずである。水害に関して城下町内部には史料が少ないとするが、通常被災範囲を含むそれらが多く残されているのは、町方よりも村方である。Ⅵ章で紹介する「起こし嶽下年季仕法」も、それら対応の中で生まれた救済方法の側面が強いのではないだろうか。そして「水防令」に登場する村々や量水標のある重要地点も、地名を含めて位置関係が図示されておらず城下町からみてどこに、どの距離で所在しているのかなど、福山に土地勘がない読者には極めてわかりづらい。同様に、水制工の具体例として「第39図 芦田川東岸の水勿(中津原絵図 明治7年)」(154頁)を紹介している。中津原村は「芦田川が高屋川が合流するあたり」(121頁)とのことだが、この絵図には水制だけでなく、堤内にも長方形や円形の小さな「水色」の土地利用が散見される。評者としては「これは川と同色であり、ため池ではないだ

ろうか、しかも芦田川の攻撃斜面に相当しており、旧流路やかつての氾濫地点と関連しているのではないか、ため池だとすると夏に雨の少ないこの地域の水資源としてどれほど重要なのか…」この限られた情報だけで「飯が三杯食える」くらいであるが、これは本書の意図とそぐわないのかもしれない。

一方で城下町の範囲設定に関して、高潮被害はその性質もあり、純粋な城下町の範囲を越えた海岸部に分析の主眼が移る。さらに火災では城下町内部を基準に、東、西などの方で被災地を表現する。このように、研究対象地域を取ってみても、本書では検討項目によって、第22図(109頁)が示す城下町の範囲なのか、干拓地帯から海岸までを含んだ一体なのか、現在の福山市街地とほぼ等しい地域なのか、「水防令」に登場する村方などをある程度含んだ下流域なのか、神辺平野までを含んだ中流域以南のことなのか、など、筆者が意図する福山城下町の範囲が変化し、読者に混乱を招く原因となっている。そして、せつかくの論考が「1項目ごとの事象の紹介」にとどまってしまう要因ともなっている。やはり水害に関しては、城下町の範囲ではなく、当初から流域の範囲や右岸・左岸といった地域設定が必要ではなかっただろうか。むしろそのことで、他の災害との意味づけの違いを際立たせることもできたはずである。

ところで、筆者は長年の歴史災害研究を通じて、前述した京都のデータベース化も含め長期間の災害集計を基にした研究手法を確立しており、その一端は「第42図 防災・減災の知恵の抽出プロセス」(183頁)からも知ることができる。他方で評者は、地方文書から復原できる土地利用や水防組合の実態などから水害常襲地域の特徴を描き出す研究を行ってきた³⁾。そういった研究手法や着目点の相違が今回の論評になっていることはご容赦いただきたい。

さて、筆者は日本各地で出版された災害記録・災害資料を刊行するプロジェクトを継続中である。この企画をはじめた動機として「いずれも刊行部数が少なく、被災地域でも多くの人に読まれることもなく、そこから多くの教訓を得られるこ

ともなく、いわば忘れられた存在に甘んじていたことを知った」(10頁)ことを挙げている。本書においても『日本災害資料集』の一部が紹介されているが、これら一連の災害史に関する資料は周知、活用されるべきである。論者にも経験があるが、水害に関して、例えば「近世編(1)」や「近代編(2)」のような市町村史の資料編を利用しようとする、目次すべてを当たらないと災害関係史料が含まれているか判断できない。また場合によっては見落としがちで、水利組合史や消防史など近代に刊行された出版物の中にも、ページ数を割いて江戸時代の書き上げが活字化され収録されている場合もあり、論文を書き終えてからその資料の存在を知ったということもある。体系的な水害資料の出版は、研究者にとっても大きな一助となる。

最後に、本書の意義を筆者の言葉を引用しながら紹介したい。筆者は一貫して「災害の研究には学術的な意味があるだけでなく、得られた結果をもとにして多くの方々に利用してもらわなければならないという実用的な意義もある」(22頁)とする。それゆえ、論考の精緻な展開や構成よりも、わかりやすい例えや、一部は「総花的」な記述を優先することはやむを得ない選択となりうる。本書の狙いはそこにあると思われるが、このことは、研究者が自身の研究成果を一般書として再構築したり、アウトリーチ活動を行う際には、誰にでもつきまとう課題となる。多くの読者に広く読まれることを想定した場合には、論題、装丁やデザイン、図表の選択、価格設定に至るまで、研究書や論文に慣れた人間には「畑違い」の配慮や付度が必要となるが、それらも研究者に必要とされる責任であることは忘れてはならないだろう。(山下琢巳)

〔注〕

- 1) 笹本正治『災害文化史の研究』高志出版、2003。
- 2) 吉越昭久・片平博文編『京都の歴史災害』思文閣出版、2012。
- 3) 山下琢巳『水害常襲地域の近世～近代～天竜川下流域の地域構造一』古今書院、2015。